

大阪「関西万博」

未来へつなぐ日本の書～空・海・時を超えて～ （開催報告）

公益社団法人日本書芸院、読売新聞社主催、日本書道文化協会特別協力のもと、5月7日（水）～11日（日）の間、「未来へつなぐ日本の書～空・海・時を超えて～」と題し日本の伝統文化である、日本の書を世界のSHODOへ発信する催しが、EXPOメッセ「WASSE」で行われました。

開会式が行われた初日、5月7日（水）に参加、壮大なスケールの取り組みに圧倒されました。開会式では、主催者挨拶、来賓紹介、テープカットが行われ、その後席上揮毫。席上揮毫では、先生方の紙面に向かう気迫、筆遣い、速度、余韻、張り詰めた空気に息をするのを忘れるほど見入ってしまいました。

日本の代表作家展に展示されました、書道研究一輪 小田大拙代表の作品は、「鑑（鑒）」の一文字。力強い線、へんとつくりの配置、余白、線が踊り、躍動感にあふれていました。この文字にどんな意味が込められているのだろうか。「鑑」の文字を辞書で引いてみました。“鏡に映すように手本に照らして考える” “ほかとくらべあわせて考える”と掲載されています。様々な作品を見て、比べることで自ずと気づくものがあり、作品制作に生かせばよいのでは。多くの作品を深く観察し勉強すればよい、ということに代表は作品を通して伝えようとしたのだろうかと感じました。書に向かう師の姿勢をあらためて深く胸に刻みました。

次代を担う小学生・中学生・高校生・大学生の作品展示では、力強く堂々と書かれた力作が並び、驚きと感動で、思わず目を凝らせて作品に見入りました。真剣な表情で試行錯誤しながら何時間も紙面に向かう児童・生徒の顔が浮かんできました。日々指導している私も気が引き締まり、作品から教わることが多くありました。「すばらしい」その一言につきます。

ワークショップでは、うちわ、タンブラー、絵馬等に文字を書き、手書き文字を体験する場となり、エア体験、水書き、職人による筆墨硯紙の製作等が行われました。

大阪・関西万博においての今回の取り組みは、日本の伝統文化である書道を世界へ発信し、書を通して世界との文化交流を図りそして世界平和へとつながる充実した内容でした。

「古き良きもの、新しき良きもの」時代にとられることなく次代へつなげる。このような機会と向き合えたことに感謝します。



小田大拙代表作品「鑑（鑒）」